

令和7年10月15日

石巻市議会議長 遠藤 宏昭 殿

会派名 石巻颶の会
代表者名 後藤 兼位

政務調査報告書

次のとおり政務調査を行ったため、その結果を報告します。

記

1 調査者氏名 後藤兼位、阿部正敏、西條正昭、山口莊一郎、宇都宮弘和、我妻久美子、
谷祐輔

2 調査期間 令和7年10月8日(水)から令和7年10月10日(金)まで

3 調査地及び調査内容

- (1) 愛知県豊田市「災害時にガスの種類が切り替えられる空調システム」について
- (2) 岐阜県中津川市「ひと・まちテラス」について

4 調査目的

(1) 愛知県豊田市「災害時にガスの種類が切り替えられる空調システム」について
熱中症予防運動指針においては、暑さ指数 31°Cを超過する場合に原則運動
禁止としていることから、石巻市内の学校教育現場においても、夏期の体育指
導に苦慮する状況が続いている。豊田市では、空調設備整備臨時特例交付金を
活用して市内全小中学校の体育館・武道館へ空調設備を設置し、且つ災害時の
停止リスクを軽減するために燃料種類を切替できるような仕組みを導入してい
ることから、その取り組みと効果を調査する。

(2) 岐阜県中津川市「ひと・まちテラス」について

中津川市では、「子育て支援」「市民交流」「学び（図書館）」、歴史文化
の発信も含めた「観光」の4つの機能を備えた複合施設として、「ひと・まち
テラス」が令和5年7月15日にオープンした。複合施設のメリットを活かし、
子どもから高齢者まで幅広い年齢層に4つの機能が結びついた様々なサービス
を提供して中心市街地に新たな賑わいを創出している。その取組について研修
し今後の本市の事業推進の参考にする。

5 調査概要

1. 愛知県豊田市「災害時にガスの種類が切り替えられる空調システム」について

■ 事業目的について

事業の目的は、近年の気温上昇による学校運営への影響や防災の観点から暑さ対策として安全・安心で快適な教育環境を確保することであり、災害時の避難所活用を主とした事業ではない。

■ 事業費および財源について

小中学校全校の 102 校 127 施設を対象とし、総事業費は 6,456,560,000 円。そのうち 2 分の 1 は空調設備整備臨時特例交付金を活用している。

■ 特徴

102 校のうち拠点避難所として指定される 27 校の体育館については、発電機能付きガスエアコンとガスバルクタンクを設置し、最大 72 時間の空調利用が可能となるほか、発電された電力は、一部の非常用コンセントから使用することもできる。豊田市の都市ガス供給エリア内では、電気料金よりも安価であるため、ガスエアコンを選定し、災害時の供給停止リスクに備え、非常にプロパンガスへの燃料切替できる仕様とした。

■ 設備

① 室内機

視察先の朝日丘中学校体育館では、計 14 台の室内機が設置されており、設置高さは 3.4m (空調の対象エリアを体育館全体とする場合は大規模な設備投資が必要となるため、必要な熱量を算定した結果、十分な機能を確保できるものと判断)。暖かい空気が上昇していくため、当初は暖房運転の場合の効果に不安を抱いていたが、排出口からの風向きで十分に利用空間に暖かさを届けられることを職員自身が確認済。エアコン上のキャットウォークには断熱対策として黒い遮熱カーテンを設置。



② 空調制御盤



朝日丘中学校の場合は、全 5 系統あり、通常時は 1 系統をプロパンガス、残りの 4 系統を都市ガスから供給している。平時の空調操作盤は施錠されており、消し忘れなどが無いよう、責任者が管理することとしている他、職員室からの遠隔操作も可能としている。

③室外機およびガスタンク

都市ガスよりもプロパンガスが高価でありながら5系統中1系統を常時からプロパンガス供給で固定しているのは、非常時の活用に限定する場合、いざという時に使えなかつたりどのガス事業者が担当しているのかを把握できなかつたりといったリスクが想定されるため。



④都市ガス・プロパンガス切替バルブ

屋外に設置されており、手動で切替作業を行うことができる。



2. 岐阜県中津川市「ひと・まちテラス」について

■ 中津川市の概況

中津川市は、岐阜県の東南端に位置し、東は木曽山脈、南は三河高原に囲まれ、中央を木曽川が流れる自然豊かなまちである。東西28キロメートル、南北49キロメートル、総面積676.45平方キロメートルと岐阜県で6番目に広い市で、まちのシンボル恵那山をはじめとする山々の懷に抱かれている。

古くは東海道、中山道、飛騨街道などの交通の要衝として栄え、中核工業団地の完成により企業も多数立地し、商工業都市として成長してきた、一方、豊かな自然環境のなかで、広大な森林から産出される東濃桧を代表として、優れた農産物などを産出する農林業地域でもあり、地場産業の盛んな都市である。現在、リニア中央新幹線の岐阜県駅と中部総合車両基地の整備が進められており、リニアを生かすまちづくりを進め「住み続けたい、住んでみたいと思うまち」を目指している。

- 人口：73,535人（2025年1月時点、高齢化率33.8パーセント）
中心部「中津」地区人口：25,591人
- 面積：676.45平方キロメートル（県内で6番目の広さ）

■ 中津川「ひと・まちテラス」

中津川ひと・まちテラスは、「ひと、まち、未来を元気にする交流と学びとにぎわいの拠点」を基本理念として、旧中山道に面した市有地と隣接する私有地も取得して整形した土地に、地上3階建て、鉄筋コンクリート造+一部鉄骨造+PC造の棍構造で、「子育て支援」、「市民交流」、「学び（図書館）」、歴史文化の発信も含めた「観光」の4つの機能を備えた複合施設として整備し、令和5年7月15日にオープンした。



■ 施設構想につながった課題

- 中心市街地の地盤沈下（歩行者・空き店舗）
中心部の歩行者通行量や空き店舗の問題が長期化。中津川市は“市の顔”である新町ビル跡地の活用を最重要課題に位置付け、「回遊が生まれる核」をつくる方針を掲げた。
- 「来るけど回らない」問題（導線・サインの弱さ）
駅前から中山道・商店街へ人を“歩かせる”仕組みが弱く、回遊性の再設計が必要に。来訪者を面で回す仕掛けが要るという認識の強まり。
- 市民の満足度の低さと“期待のズレ”
中心活性化の満足度は長期での改善が鈍く、大型商業・娯楽施設の誘致を望む声など“市民意識と方針の乖離”が続いていることを自己評価で明記。公共投資の効果を体感に変える取組が要るという問題意識。
- 学び・子育て・交流拠点不足（社会教育の受け皿）
図書館の拡張移転とDX、子育て支援・市民交流・観光をワンプレイス化して“誰でも来られ

る入口”をつくる必要性。→複合一体の図書館中核施設という解に収束。

- 公共空間の使いこなし不足（制度・担い手）

公園・広場・河川などまちなかの公共空間を民間と一緒に使いこなす仕組みが弱く、滞在時間を伸ばせていない。→公共空間活用を“制度化+伴走支援”で進め、テラスとの相乗効果で回遊を高める方針へ。

- 交通・将来投資の文脈（リニア見据え）

人口減少・少子高齢化の進行、将来のリニア関連まちづくりに対応する“歩いて楽しめる中心部”づくりが必要。拠点整備+都市交通の再設計というセットで捉えられている。

要点：施設設置以前も「点の集客」はできていたが、「面で歩く」「学び合う」「起業・出店」が足りていなかった。それを一つの施設（テラス）を核に、公共空間と民間までを巻き込んで連結する必要性を感じていた。

■ ひと・まちテラスオープンまでの経緯

平成20年7月	「第2次中心市街地活性化基本計画」策定 →新町ビル跡地開発事業として、新図書館建設事業等を計画
平成24年5月	新図書館建設事業の中止を決定
平成26年5月	若手職員グループによる検討と提案も組み入れた「中津川市街地活性化検討会議」の開催（全10回）
平成30年6月	「第3次中津川中心市街地活性化基本計画」策定 →「新町ビル跡地開発事業：市民の交流によるにぎわいの創出の拠点となる複合施設の建設事業」を市実施事業として明記
平成30年12月	「リニアを活用したまちづくり推進市民会議」を設置し、複合施設整備に向けた検討をスタート（全5回）
令和元年7月	「中津川市リニアを活用したまちづくり構想」策定 →複合施設に求められる機能について決定 「子育て支援」「交流」「学び」「観光」の4つの機能を明記
令和元年7月	「図書館機能検討委員会」での検討開始（全4回）
令和2年2月	「（仮称）市民交流プラザ整備実施計画」策定
令和5年7月	竣工式・オープン

■ ひと・まちテラスのコンセプト

「子育て支援」「市民交流」「学び（図書館）」「観光」の4つの機能

複合施設のメリットを活かし、子供から高齢者まで幅広い年齢層市民や市街から訪れた方に4つの機能が結びついたさまざまなサービスを提供して、中心市街地に新たなにぎわいを創出していく中津川市が進めるリニアのまちづくりの要となる施設。

利用者を増やす — 多世代 — • 子どもから高齢者まで幅広い世代での利用
• 若者と女性が集まる活躍と交流の場

— 多様性 — • 図書館も市民交流の場所として開放
• 市民の多様な使い方をイメージ

立地を生かす — 駅前 — • 市内学生の通学路線上のたまり場
• アクセスを活かした営利活動と会議、集会

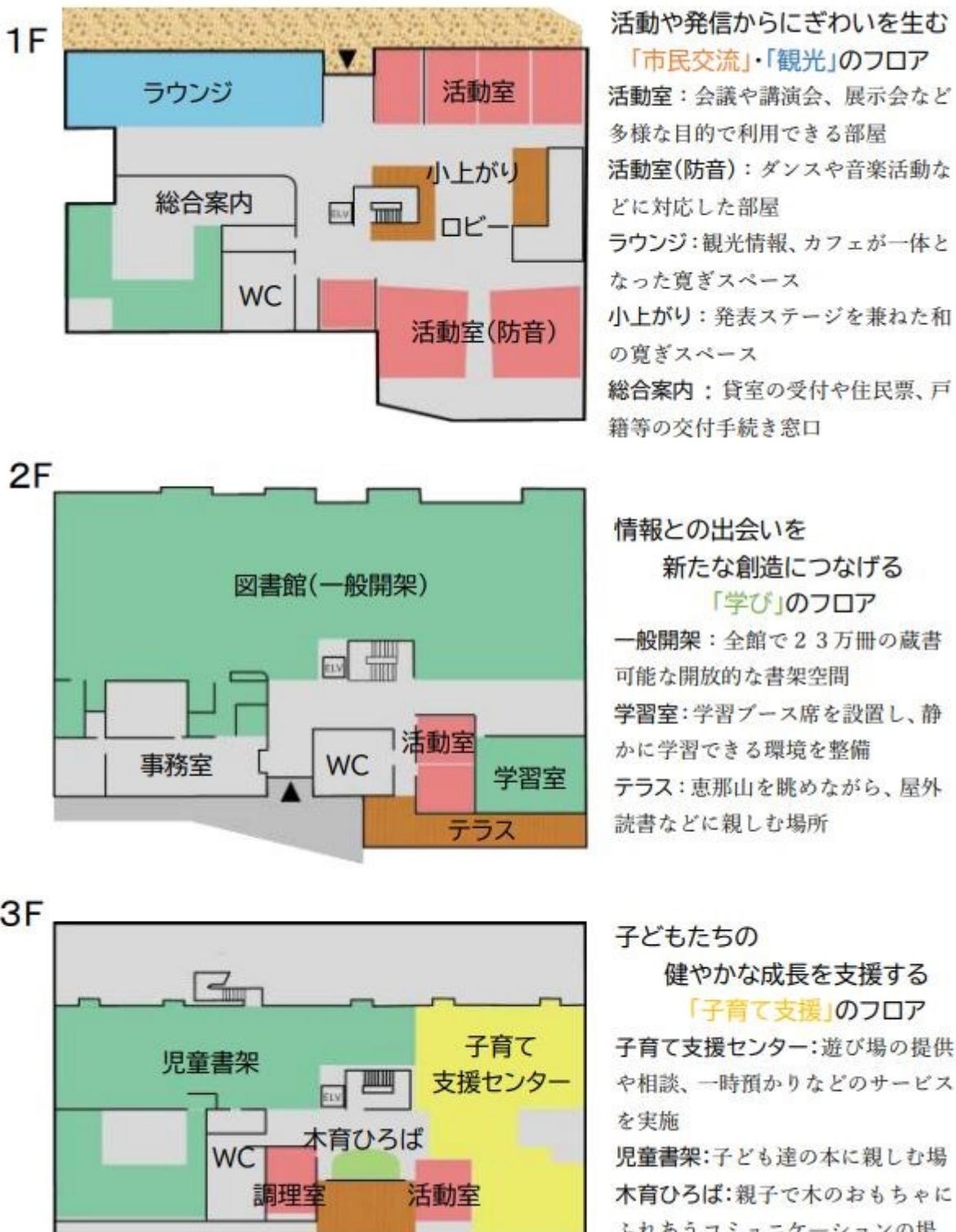
— 中山道沿 — • 街道文化と観光情報を発信する休息場所

・まちに溶け込む趣のある宿場風デザイン

- 活用を拡げる
—イベント—
 - ・様々なイベントのかたちを想定した汎用性
 - ・商店街イベントとの連携重視
- 駐車場—
 - ・遠方からの利用者への利便性配慮
 - ・にぎわいの広場としてまちへの開放

■施設内フロア構成・平面図

【施設内フロア構成・平面図】



■ 施設概要等

建築面積：2046.94m² 建蔽率：66.58% 延床面積：4776.94m²
容積率：152.06% 階数：地上3階建て 高さ：17.454m
総事業費：3,057百万円（平成31年度～令和5年度）
支援制度：社会資本整備総合交付金（1,322百万円）
岐阜県清流の国ぎふ推進補助金等県補助金・森林環境補助金（15百万円）
地方債（1,490百万円） 一般財源等（230百万円）

■ サービスデータ

営業時間：貸館 午前9時～午後9時30分
図書館 午前9時30分～午後8時（平日）（～午後6時土日祝）
子育て支援センター 午前9時30分～午後4時30分
休館日：無休（年末年始除く）図書館は月曜日：図書整理日休館
運営形態：市直営（一部管理を民間委託）
駐車場：207台（無料）

■ 運用体制

ひと・まちテラス：商工観光部…施設運営・事業企画実施
図書館：文化スポーツ部…図書館運営・事業企画実施
子育て支援センター：医療福祉部こども家庭課（NPO法人への委託業務）

■ 運営経費（令和6年度）

施設管理費 71,200千円（窓口・警備等委託、光熱水費、消耗品費他）
事業費 5,700千円（講師謝礼、企画運営委託）
人件費 1,700千円（会計年度任用職員分）
合計 78,600千円

■ 利用状況

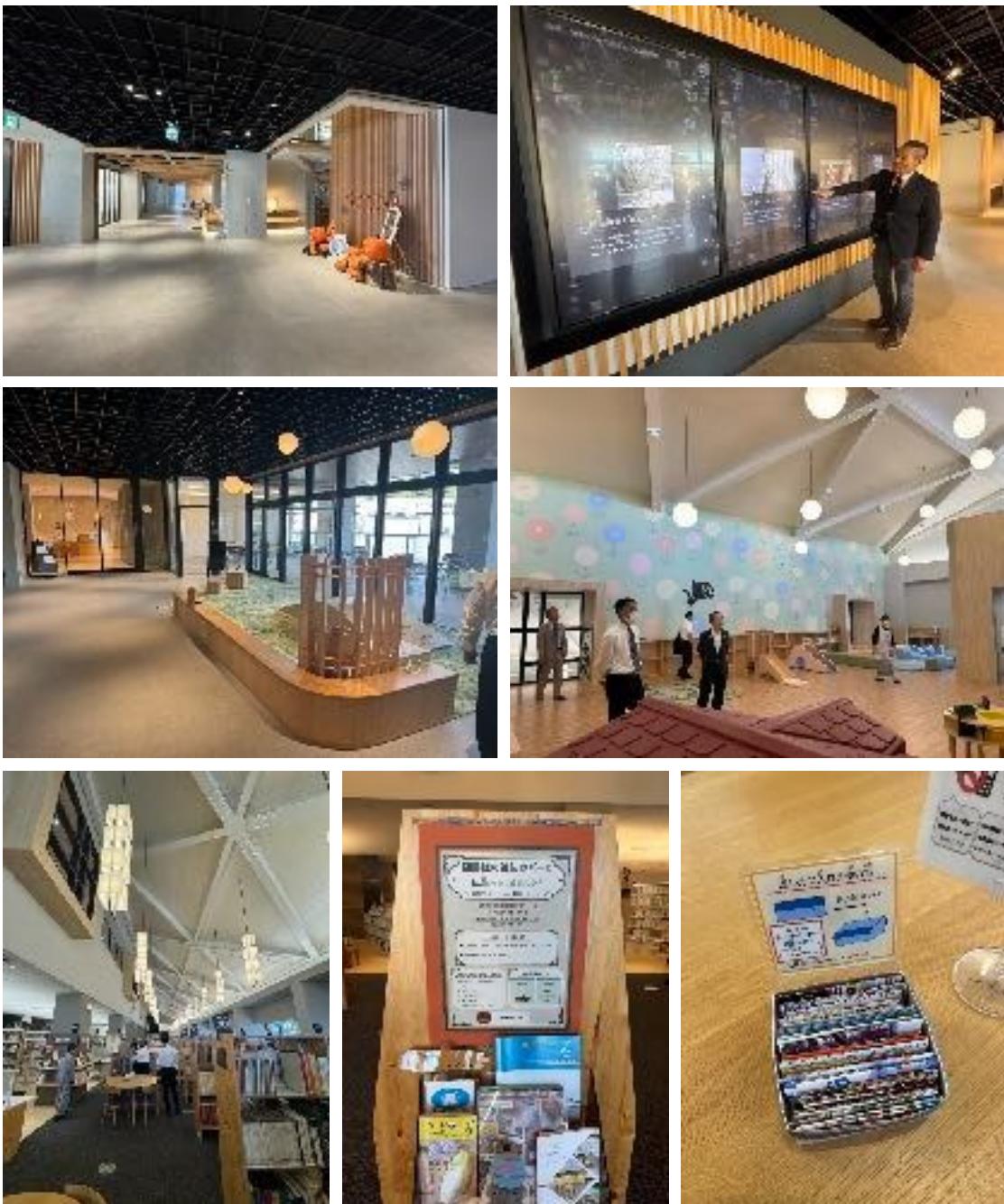
1) 開館からの来館者数

年度	来館者数	開館日数	1日平均	備考
R5	316,581	254	1,246	R5.7.15 開館
R6	467,984	358	1,307	
R7	249,840	183	1,365	R7.9.30まで
合計	1,034,405人	795日	1,301人	

2) 利用内訳

年度	活動室等 貸室	図書館	子育て支 援センタ ー	その他	合計
R5	52,604	226,385	12,982	24,610	316,581
R6	98,647	299,938	15,153	54,246	467,984
R7	37,807	137,448	6,482	22,818	204,555
合計	189,058	663,771	34,617	101,674	989,120

■ 写真で見る「ひと・まちテラス」



■ 質問と回答

- 問 最終フォローアップ報告書等から、周辺エリアへの”回遊”が課題として触れられていたがその後はどのような状況になっているか。
- 答 回遊を目的としたイベントの実施により数字的には増えたが、一方で、近隣エリアへの波及というような日常的な回遊導線等は今後の課題である。
- 問 若い世代になんとかきてほしい、そこに全世代が集ってほしいという思いが強いとのことであったが、このひと・まちテラスを通じて若者の社会参画は増えたのか。
- 答 地元のイベント（六斎市）だけ見ても若者の参画は非常に増えた。この施設が社会教育の核となっているのを感じる。
- 問 中心市街地活性化の一環が大きなことは理解するが、遠方に住む市民からはアクセスしづらい等の声はあがらなかつたか。
- 答 機能分散させるよりもまちの核をつくることを第一に考えた。そこは理解していただいた。

6. 所感

(1) 愛知県豊田市「災害時にガスの種類が切り替えられる空調システム」について

全ての小中学校に空調施設が整備され、視察当日は実際に体育館内で元気に体育の授業をしている生徒の状況も拝見させていただいた。豊田市は決算規模も石巻市の3倍ほどであり、且つ地方交付税の不交付団体でもあることから総事業費 64 億円は予算規模の3%弱に過ぎないが、石巻市においては令和6年度決算における1年間の教育費総額が 96 億円ほどであったことからすると、64 億円を追加するハードルは相当に高いものと認識した。さらに石巻の都市ガス供給エリアは限られており、且つ料金的にも安価とは言えないことなどから、同様の設備投資は難しいものと受け止めざるを得ないが、猛暑期での子どもの教育環境の整備は重要な課題であり、豊田市同様に災害時避難所という観点はあくまで付随的な要素として検討していく必要があると認識した。

(2) 岐阜県中津川市「ひと・まちテラス」について

今回視察した中津川市の「ひと・まちテラス」は、図書館・市民交流・観光案内・子育て支援など、複数の公共機能を複合的に配置した都市拠点施設であり、中心市街地のにぎわい再生と市民の学び・活動の場づくりを同時に実現しようとする意欲的な事例であった。

特に印象に残ったのは、単に“新しい建物をつくる”という発想ではなく、施設を拠点としてまち全体の再生や人の流れをどう生み出すか課題感を解消する視点が丁寧に織り込まれていた点である。図書館機能と市民活動支援、観光・商店街との連携を通じて「歩いて楽しい」「関わって心地よい」まちの核が形づくられていた。また、施設整備とあわせて運営面での工夫（企画イベント、回遊導線の設計、市民団体との連携等）にも力が注がれており、ハードとソフトの両輪で中心市街地の価値を高める姿勢から学びを多く得られた。

7. 調査による石巻市への政策提言等について

(1) 「学校体育館への空調システムの導入」について

近年の地球沸騰化により、学校現場における夏期の運動環境が確保できないということは大きな課題である。豊田市が活用した「空調設備整備臨時特例交付金」は令和15年までの時限制度であること、石巻市には豊田市のように単年度もしくは2年程度で全校を設備更新するような財政状態ではないことから、本市教育委員会には、学校体育館への空調設備設置に関する方針を早急に打ち出して同特例交付金を活用した計画的な実施を求める他、窓や天井への遮熱シートなど工期が数日で終わるような対策については早期に実施するよう提言していく。

(2) 「公共施設のあり方」について

石巻市においても、限られた財源の中で持続可能な公共施設の整備を『市民意識との乖離』がないよう進める必要性を感じた。施設整備は“建物をつくること”が目的ではなく、“使われる施設”をいかに実現するかが本質であるという視点に立ち返る必要がある。中津川市のひと・まちテラスでは、運営段階において市民活動団体との協働やイベントの継続的企画、柔軟な空間利用の仕組みづくりが実践されており、施設が市民の手により“育っていく”環境が見受けられた。石巻市でも、新たな施設整備や既存施設の活用を考える際には、設計・建設の段階から「どのように市民に使われるか」「運営にどう関わってもらうか」という視点を取り入れていく必要性があり、その第一歩として、既存の公共施設が「市民にどのように使われているのか」、あるいは「どのように使われてほしいのか」という視点から見直し、必要に応じて改善していくことを提言し、今回の視察報告とする。

8. 調査経費

498,699円

9. 添付書類

別添資料のとおり